

第41回広仁会賞 中森 正博

題 名 : Association between stroke lesions and videofluoroscopic findings in acute stroke patients

(急性期脳卒中患者における脳病変部位と嚥下造影検査所見の関連)

発表誌 : Journal of Neurology・2021年・268巻 3号(1025-1035頁)

…………… 《 論 文 内 容 要 旨 》 ……………

脳卒中に伴い生じる嚥下障害は誤嚥性肺炎のリスクとなり、生命予後や転帰に大きく影響する。またそれは医療・介護費の増大にもつながる。そのため誤嚥性肺炎を未然に防ぐための評価と対策が重要である。脳卒中に伴う嚥下障害およびそのパターンにおいて、病変部位は最も重要な因子であるが、脳画像所見と嚥下評価を多数例で詳細に行った研究は極めて少ない。今回、急性期脳卒中患者を対象に、脳画像の詳細な解析と、嚥下評価のゴールドスタンダードである嚥下造影検査の所見を比較検討することとした。2016年8月1日から2020年3月31日まで翠清会梶川病院に入院し、頭部MRIを実施した初発脳卒中患者を対象とした。認知症や意識障害患者は除外した。頭部MRIで脳卒中の病変部位を詳細に特定すると同時に、嚥下造影検査で3 mlの飲水を行い、誤嚥、喉頭侵入、口腔内残留、喉頭蓋谷残留、咽頭残留、嚥下反射惹起遅延の有無を各々評価した。また、スクリーニングとして舌圧測定も同時に行った。結果、342例で検討を行った。誤嚥は45例あり、多変量解析で脳卒中重症度 National Institutes of Health Stroke Scale (NIHSS) と頭頂葉病変が独立した有意な相関因子として得られた。嚥下反射惹起遅延は58例あり、多変量解析で、NIHSS と大脳基底核病変が独立した有意な相関因子として得られた。一方、口腔内残留と咽頭残留は、多変量解析で舌圧値と有意な相関がみられた。頭頂葉は感覚野を有する部位であり、咽喉頭の感覚低下によって不顕性誤嚥を来す可能性が示唆された。また、大脳基底核はパーキンソニズムと関連する部位で、リズム障害によって嚥下反射惹起遅延をきたす可能性が示唆された。この結果をもとに、頸部感覚神経の電気治療による賦活や薬物治療による介入の有用性が期待できると考えられた。